

# 東日本大震災から10年

火箱 芳文 陸自74

編集委：本稿は、3月18日・同25日付の朝雲新聞に掲載されたものです。9月の防災月間に併せ、転載します。

## はじめに

東日本大震災から10年が経つ。震災の記憶も薄れていく国民も多くなっていると思われるが、当時の陸幕長として大震災を戦後最大の危急的事態と認識し、これに全力で対応した陸上自衛隊（陸自）の活動は今も鮮明に思い出される。

## 震災の初動について

2011年（平成23）3月11日、午後2時46分、事務次官室で会議中、ものすごい振動に襲われた。テレビに三陸沖を震源地、マグニチュード8・4の地震、津波の発生可能性ありと表示された瞬間、東北地方で「戦」が起きたと思った。会議は即中止。11階から4階の執務室まで階

段を駆け下りながら、「東北方だけでは足りない」「通常の手続きでは遅れる」「72時間以内に大部隊を送り込む」「どの部隊を残しどの部隊を出す」と部隊運用構想を固めた。

各方面總監に直接電話で出動を指示  
執務室に飛び込み君塚東北方總監に電話。「やられました！室内は物が散乱、停電でテレビも映りません」「分かった、東北方面隊直ちに

出動！全国から部隊を増援する。君が指揮を執れ」じ後西方總監から順に各總監に電話した。防衛任務の継続と派遣する師団・旅団、施設団の出動を命じた。各總監は統合運用の原則の越権行為、シビリアンコンの原則の原則背反の疑いなしとしない異例の電話に戸惑ったことと思うが、指示通り迅速に行動してくれた。全て責任を負うつもりだった。戦後最大の国家的危急事態に対する史上最大の戦力集中と長期にわたる作戦（延べ1066万人、期間291日間）が開始された。陸上自衛隊は最大5個師団、4個旅団、3個施設団、1個特科団、1個高射特科団、生活支援隊も入れ、最大約7万人を投入した。

苦闘した人命救助・行方不明者捜索、生活支援などの応急復旧

震災から72時間以内に全ての部隊を送り込むことはできなかったが、生存者が確認された19日までには東北方面隊の他に3個師団、2個旅団が救出活動に入った。被救助者総数2万7157名のうち、自衛隊は1万9286名（うち陸自1万4937名）を救出した。

20日以降は人命救助を主体とする応急救援活動から、行方不明者捜索、避難者の生活支援を主体とする応急復旧活動に重点を移行した。津波が襲った地域は大量の瓦礫、ヘドロで覆われ、多くの冠水・水没地があり、

行方不明者の存在自体が不明な中で捜索活動であり難渋を極めた。施設団が瓦礫に覆われた計323<sup>キ</sup>ロ、以上に及ぶ道路啓開、補修あるいは架橋等交通網の確保に努めつつ、機械力で瓦礫の除去・搬送を実施した。捜索部隊は冷たい泥水に胸まで浸かり、ずぶぬれになり、あるいは大量の瓦礫、堆積したヘドロに足を取られながら、被災者の心情に配慮した丁寧な手作業を繰り返し、徐々に捜索完了地域を広げていった。捜索活動を黙々と繰り返し、陸自だけで8

416体（自衛隊で9505体、全部で1万5844体）のご遺体を収容した。またご遺体搬送、埋葬支援も合計2004体行った。また最大37万人という大量の避難者に対する生活支援は膨大であった。当時は

民間の物流が滞っており、避難者の生活用品、食料にも事欠くような逼迫した状況であった。14日以降各方面總監に指示し、生活支援隊を増援するよう措置した。併せて自衛隊独自で全国から物資を東北へ届ける全国民生支援物資輸送やミニSS（防衛用燃料の無償提供）など初の試みも行った。

隊員用の炊事車、野外入浴セットなどは全機材を避難者用に提供し、また各医療関係者を集中運用して避難所での治療に当たるなど、被災者を全力で支えた。3月29日以降6回現地に入ったが、現場には真実がある。厳しい過酷な任務を遂行しているながら、部隊長を核心にして一致団結、一切の言挙げをせず黙々と被災者に対し献身的に行動する部隊・隊員を見て、目頭が熱くなった。視察を重ねる度に瓦礫、ヘドロ等が除去され元の地表面が露出し、復旧していく光景を見て、陸上自衛隊の偉大

さ、凄さ、隊員の頼もしさ、矜持を感じた。一方で被災者優先の自己犠牲的な隊員の過活動的行動については終始気掛かりであった。当初から兵站支援体制の区分変更を行い、捜索・収容に不足する装備品(グラブ、プル等機械力、胴長、長手袋、鳶口、遺体収容袋など)の補給に努めたものの、長期戦に耐え持続的な戦力發揮のための人事・兵站支援策(温給食、栄養食品、戦力回復センターの設置、部隊交代、即自、予備自の招集、司令部幕僚の派遣など)は必ずしも十分でなく、満足な休養も取らせてやれなかった。また大量の遺体収容捜索に伴うPTSD対策(メンタルヘルスチームの派遣)などの課題は残ったままである。この間過活動が原因と思われる3人の尊い犠牲者を出してしまったのも悔恨している。

## 原子力発電所事故対応

発災後原子力災害派遣計画に基づき住民避難支援準備、屋内待機地域への食料、給水支援、除染所(9カ所)の開設などは実施していた。原発は「主力電源喪失、だが当面の危険はない」と自衛隊は認識していた。12日から13日にかけて、郡山部隊など

が東電の要請に応じ、電源車の輸送、冷却水、燃料の輸送支援を行っていたことも承知していた。発災直後の陸自としての焦点は大部隊運用のための人的、物的基盤を整えることであつた。官邸からは12日の15・36の1号機の水素爆発(爆発的事象と発表)、2号機の損傷にも拘らず自衛隊への差し迫った連絡は何もなかった。自衛隊は、原発事故は東電と政府、原子力安全・保安院で対処するのだからと思つていた。

統幕は13日には災統合任務部隊を編成することを決定、14日11・00北澤防衛大臣と折木統幕長が仙台に出張、君塚東北方総監に統合任務部隊指揮官の辞令を交付する予定であつた。奇しくも同時刻福島第一原発では、3号機の水素爆発が起きた。衝撃的な映像だった。直ぐに原発内の陸自隊員4名の負傷の連絡が飛び込んできた。これ以降「原発は大丈夫ではなく危険」との認識に変わった。後の祭りだが原発の状況を早期に政府、原子力安全・保安院、東電、自衛隊で共有していたならば、違った方向で原発事故に対応できていたかもしれない。悔やんでも悔やみきれない。

## 犠牲者を覚悟しての空中放水

15日09・32官邸から初めて「原発が極めて危険、オフサイトセンター閉鎖、原発への燃料輸送中止」との連絡があり、10・25緊急大臣・幕僚長会議が開かれた。大臣から「官邸から原発への放水要請が来ている」突然の要請だった。大臣も統幕長も陸自がやれともへりからやれとも指示はなく、会議は「放水については検討する」で散会。会議後4幕長が集まり、しばし皆沈黙の後、私は肚をくくつた。「とにかくここは陸上自衛隊がやるしかない。統幕長、陸自で引き受けます。早急に検討しましょう」と応えて部屋を出た。会議後各部長を集め、「空中放水作戦は陸上自衛隊がやる。我々しかできない(犠牲者が)出るかもしれないが、原発を鎮めなければ日本列島は分断し国が潰れる。高田元長崎県知事の言葉を思い出していた。「人の命は地球より重いが自衛官の使命はその地球より重い」と。状況不明下しかもリスクがある作戦、成果も確信も持てないが、状況不明等の理由により決心をためらう事があつてはならないと自分を戒め、堅確な意志をもって遂行すべきと思つた。でない

と部隊は遅疑逡巡する。それから統幕、陸幕で種々の検討を行い4号機の燃料プールへの投下を先ず第1に行い、次いで3号機への投下を行うことになった。併せて2・4号機へのホウ酸投入も準備するであつた。異論はない。統幕から16日に4号機の燃料プールに空中放水する命令が中央即応集団へ下つた。中央即応集団ではリスクの伴う放水任務であり、クルーを志願制にする考えもあつたようだが、第1ヘリ団は通常のローテーションでやると応えたという。パイロット達の任務意識、矜持が伝わってくる。

16日14・20 4号機への放水を試みたが、外部放射線量の多さから一旦帰投した。翌17日09・48〜10・00にかけ歴史的なCH47×2機による3号機(目標変更)に対する空中放水(2機で計4回30ト)が行われた。よし、よくやった! 次いで19・35から陸海空の自衛官が航空基地の高性能消防車5台で3号機の燃料プールへ地上から放水を行った。これらの放水は安定性に欠け、無意味、無謀な作戦と批判も受けたが、このことが東電の職員への原発再興意欲の振作と米国の東日本大震災へ

の本格的支援のキツカケになったと確信している。それ以降自衛隊はオフサイトセンターでの政府、警察、消防、東電の調整の中心的役割を果たし、燃料プールへの地上放水、サーモグラフィ測定、ヘリ映電装置による精密撮影など原発の鎮静化に寄与した。

幻に終わったが最悪の事態を想定して備えていたホウ酸投入作戦、改造装甲車等を使った原発内東電職員等の救出作戦並びに4月18日から6月8日までの間、再編成し約3400名で行った原発30<sup>キ</sup>圈内の放射線下の徹底した搜索、復旧活動は、タイベックススーツ、防護マスクを装着しての過酷な活動であり記憶に留めてほしい。

## 最後に

とに繋がれば望外の喜びである。  
最後に、本震災で亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、被災地の復興を祈るばかりである。

地震・津波災害と福島第一原発事故の複合的事態に全力で対処した経験の一端を紹介したが、日本にはこれほど素晴らしい自衛隊という組織があることを国民には広く知ってほしい。私自身このような素晴らしい隊員たちと一緒に勤務できたことを生涯の宝としている。この記事が献身的活動に従事した隊員に報いるこ